

リハビリ看護の実践力アップをサポートします!

リハビリナース

REHABILITATION NURSE

2
2011
Vol.4 No.2

特集

患者家族の“ここを教えてほしかった…”に応える

本当に役立つ退院指導

特別寄稿

- Rehabilitation institute of Chicagoにおける海外研修報告
～全米No.1のリハビリテーション病院から学ぶ最新のリハ事情～

新連載

- 困った家族の“素顔”を知ろう!
「関わりの難しい家族」の
理解と調整・相談という家族看護スキル

連載

- 小児への摂食・嚥下支援
発達障害児の発達の特徴および摂食・嚥下の特徴
- リハ病棟、“ちょっと”気になる事例!
(再発性)多発性脳梗塞、両側性不全片麻痺
- “フォーマット”ギャラリー
ボバース記念病院「MRI画像シート」
- リハビリナースのための解剖学〈脳編〉
脊髄の解剖学
- 建もの“改修”探訪
使いやすい手すりとは
- 初心者のためのリハビリ用語解説
PEG/AFO



文字が大きく
さらに読みやす
くなりました!

だから

リハビリナースは

やめられない!



患者さんに意欲のタネを



くも膜下出血後遺症のOさんは44歳の男性。目立った麻痺はなく、入院時から独歩が可能でしたが、自分の部屋やトイレの場所が覚えられない、時間の管理ができないなど、いわゆる高次脳機能障害が生活に影響を及ぼしていた。行動するたびに混乱するOさんに対して、見守りや誘導が主なかわりとなった。私たちには、繰り返しの見守りや誘導であっても、Oさんはまったく初めての体験かのような反応の日が続いた。担当の看護師やリハビリスタッフを中心に見守りの距離や頻度を調整することで、場所や日課を徐々に覚えられ、自立部分が増えた。毎日のラジオ体操にも初めはOTの誘導で参加されていたが、リーダー役を勤められるといつのまにか、「みなさん、ラジオ体操始めますよ～」とほかの患者さんを誘い、大きな声で号令を出しながら円の中心で体操をされるようになった。その表情はいきいきとしていて、誘われて参加した無表情な患者さんもOさんが「が・ん・ば!」と声をかけると、照れたような笑顔に変わり自然と手や身体が動いていた。スタッフもOさんを見て体操をした。退院前日、「僕はくも膜下出血ですぐにいろいろ忘れます。でも毎日リハビリを続けて元気になりました。皆さんもあきらめずにがんばってください」と立派なあいさつをされ、リハビリスタッフからラジオ体操リーダーに手作りの「感謝状」を贈った。

回復期リハは「意欲を支えること」と聞いたことがある。まさしくリハビリナースの役割と思う。目には見えず、評価も難しいことではあるが、患者さんが退院後の生活（人生）をその人らしく過ごせるようにと考え、何かひとつでも小さくても「意欲のタネ」を持ち帰っていただけるような努力をしたい。入院中に「タネ」は見つからなくても、退院後、いつでも「タネ」が植えられるような柔らかなよい土の状態に帰っていただけたらと願う。

先日、Oさんが通うデイサービスに行くと、私を見つけてくださり、入院中よりさらに元気な声と顔いっぱいの笑顔で「いやあ、お世話になりました」と向かってこられました。「お元気そうで」と返すと、Oさんは「どこでお世話になりましたっけ?」……。



山口リハビリテーション病院
2階東回復期リハ病棟看護師長
出羽里美 いずわ・さとみ